

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

ムルデカ

2001 (平成13) 年6月3日鑑賞

Data

監督：藤由紀夫

出演：山田純太／保坂尚輝／塚本耕司

👁️👁️ みどころ

ムルデカとは「独立」を意味するインドネシア語。日本の敗戦。しかし、島崎中尉はインドネシア独立のために戦うことを決意し、インドネシアの土となる。こんな日本人（軍人）がいたのか……。アジアの政治をあらためて勉強。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<1945年8月15日>

2001（平成13）年8月は、小泉総理大臣の靖国神社参拝問題が、中国・韓国を巻き込んで、大きな話題となった。小泉総理は、自民党総裁選挙の時から公約してきた、「靖国神社参拝は当然のこと」という姿勢を一貫して示したが、8月15日が近づくにつれて、この問題は大きくクローズアップされ、15日の靖国神社参拝は、国内的にも、国際的にも大混乱を招きかねないという政治状況となった。

そこで、小泉総理は、靖国神社参拝を急ぎよ、8月13日に前倒しする結果となった。これには賛否両論が巻き起こったが、その賛否はさておき、日本の首相の8月15日靖国神社参拝は、これほど大きな政治上のテーマとなる問題だ。しかし、はたして私たち日本人は、その意味合いをどこまで理解できているのだろうか。また中国・韓国が、他国の総理大臣の靖国神社参拝問題に、これほど「神経質」になるのはなぜなのか、について、私たちはどこまで理解できているのだろうか。

そう考えてみると、私たち日本人は、日中の歴史・日韓の歴史について、もっともっと勉強しなければならぬことに気づく筈だ。

<民族独立の闘い>

「ムルデカ」とは、「独立」を意味するインドネシア語。このタイトルからわかるとおり、

この映画は、太平洋戦争で日本が敗退し、終戦を迎えた後、インドネシアの独立のために、インドネシアの人と共に戦った旧日本陸軍の将校と兵士たちの姿を描いた作品だ。

しかし、私を含め多くの日本人は、インドネシアでのこのような歴史上の出来事をほとんど知らないと思う。もちろん、この映画での、旧日本軍将校や、旧日本軍が創設した軍事教練の機関「青年道場」などの描き方が、どこまで正確なのかはわからないが、流れとして、このような動きがあったことは、まぎれもない歴史上の事実だ。戦後日本の「経済的」繁栄の中で、多くの日本人は、既にベトナム戦争の功罪やその位置づけすら忘れかけているのだから、この映画が描く、インドネシアの独立戦争までは、とても勉強できていない。

1997年には、チベットへの中国軍の侵入も描かれた「セブン・イヤーズ・イン・チベット」という作品があった。この映画に登場する、チベットの「ダライ・ラマ」いう人物も、この映画を見た後は新聞記事を読んで理解できるようになったが、それまでは、私もほとんど知らない世界の人物だった。

しかし、この映画が描くチベット問題、さらには、2001（平成13）年9月11日発生した、アメリカでの同時多発テロとの関連でニュースによく出てくる、中国西部の新疆ウイグル自治区の独立運動（問題）など、中国とその周辺の国々との政治問題も、現実存在している大問題だ。

こんな、様々なアジアにおける政治問題を勉強しなきゃダメだ、と思わせてくれる作品が、この「ムルデカ」だ。

<インドネシアの土>

主役は、旧陸軍の南方戦線戦闘部隊の島崎中尉（山田純太）。日本軍は、オランダ領ジャワ島（インドネシア）からオランダ軍を追っ払うことに成功。そしてインドネシアの国民に、将来の自治独立を約束して、インドネシアの青年たちを軍事教練する機関「青年道場」を開設した。しかし、日本国と日本陸軍は次第に暴走。将来の自治独立の夢か、それとも日本軍への従属か、という矛盾に直面する事態となる。

そして日本軍の敗北と軍備の解除。やっと独立か・・・と思いきや、再びインドネシアはオランダの侵攻下におかれることになる。そして島崎中尉たちは、日本への帰国をあきらめ、独立軍へ参加。インドネシアの土となることを決意する。

激しい戦闘場面の連続もあり、見ていて飽きることはないが、その迫力以上に心に残るのは、島崎中尉たち青年将校の、純粋な国や同胞を思う気持ちだ。大日本帝国陸軍の軍人としての教育を受けた彼らが、自らの意志として、インドネシア独立のため、「青年道場」の教え子たちに協力して、インドネシアの土となる途を選ぶ決心をするのは、そりゃ、大

変なことだったと思う。

今時の日本の若者には、是非、こういう映画を観て、涙を流して欲しいと思う。そして本音の感想を聞かせてもらいたいと思う。

2001（平成13）年10月記